

・通訳という仕事

私にとっては、一夜漬けで試験に挑む日がひとつ終われば、また次が控えている、しかもその試験科目が毎回違う、そんな比喻が通訳者の人生にはピッタリだという気がする。

一九八三年から八四年にかけて、シベリアの奥地、地球の寒極オイミヤコンの近くへのテレビ取材に同行して真冬の一カ月を過ごしたことがある。冬期平均気温がマイナス五十度、私が行った時点で一番寒かった日がマイナス五十九度。眼の表面の水分が凍り、瞬きするとシャーベットが出来ていくのを体験した半年後、旧ソ連の当時はトルクメニア共和国と呼ばれた国で、日本からエアコン設備を輸出するための商談の通訳に雇われた。ここでは炎天下プラス七十度というのを味わった。

近視矯正手術を受けに訪ソする患者さんたちに付き添って、検査と手術の現場に立ち会ったこともある。角膜に放射状の傷をつけて屈折率を変え、角膜を通過する像がちょうど網膜のところで結ぶようにする。そのことによって視力を取り戻すという手術。眼球の構造と“各部品”の名称を必死で丸暗記したものだ。

帰国した翌日は、万国家禽会議で、「卵のコレステロールのほうが豚のコレステロールに比べてどれだけ優れものであるか」とか「鶏をあまりにも非人道的に扱っている。もう少し鶏の福祉を考えるべきだ。居住環境をよくすべきだ」という話を「ああ、どうせ絞めて喰ってしまうのに」と思いつつ、もちろんそれをおくびにも出さずに通訳していたかと思うと、夜はボリショイ・バレエのプリマのインタビューがあるので、「パ・ド・ドゥ」と「パ・ド・トロワ」はどう違うのかなどなどを予習し、翌日からは二日間のセミナーで、「日本の天皇制とロシア帝政の比較」とか「日本における中国研究とロシアにおける中国研究の比較」とかいうテーマの歴史学者的な報告の通訳なので、文科系出身者としては、やっと一息つけると期待していたら、中国語の固有名詞の発音が日本語とロシア語とでは想像もつか

・・・

・通訳・翻訳稼業の醍醐味

二十代の胃袋を抱えていた私がとりあえず日々の糧を稼いでいくために始めたのがロシア語通訳稼業。天職に出会うまでのつなぎのつもりだったのが、かれこれもう十五年にもなる。飽きっぽい性分にははずいぶん長続きしたものだと思えるのだが、その理由は、まさに通訳という職業につきものの特徴にあると思っている。

この稼業についてからというもの、人類という種族の好奇心と自己拡大の本性のすさまじさに、いくたび息を飲む思いをしたことだろう。不可能と思える分野にも、想像だにしていなかった分野にも、一見下らないと思える分野にも、人間はあくことなき探求心で挑み続け、守備範囲を食欲に無限に広げている。そのことを肌身をもって実感し、確認してきた。

役得で、人間のありとあらゆる活動分野の現場を経験する機会に恵まれる。単にのぞくというよりも、言葉という媒体を通して、ほとんど当事者になりきって実にさまざまな職業、さまざまな人々の立場を追体験できるのだ。その意味では、古今東西多種多様な人間の営みを、演ずるという行為を通して、追体験する俳優に似てなくもない。しかし、俳優のそれはあくまでも虚構の世界でのことであるのに対して、通訳が相手にするのは、常に生きた現実の世界なのである。

そして同時にいろいろな立場の人、各分野の人々の頭の中を垣間見ることが出来る。言葉というのは、表現の手段であるだけでなく、思考の手段でもあり、いわば人間の考え方の型を如実に反映するものである。通訳するとき、あるいは翻訳するとき、訳者はスピーカーや原文作者の思考の型をも他言語に移し替えるのである。だから、さまざまな他人のものの考え方の構造と筋道を、受動的にだけでなく、能動的に実体験できる。まさにこの点が、通訳・翻訳稼業の苦行と魅力の源である。醍醐味である。少なくとも飽きと退屈だけでは無縁な商売であると断言しても許されるのではないだろうか。

・文学部出身と理工系出身の通訳

一般的に母国語で慣れ親しんでいる概念ほど身につけやすいし、定着率も高い。だからどんな分野も、まず入門書、百科事典から入り、確実な理解を土台に用語を征服していくのが、結局は近道になる。その意味では、通訳能力とは、常に新しい分野を勉強していく

意思と能力でもある。

文学部出身者であることは、実は不利どころか、有利なのかもしれない。現在ロシア語通訳協会に百六十名ほどの会員がいる。そのうち理工系出身者はわずか五名で、残りの圧倒的多数は大学でロシア語かロシア文学を専攻した人たちだ。

面白いことに、理工系出身者が、では理工系の仕事を容易に引き受けるかというのと、彼らは大学で学んだごくごく狭い専門分野のみに閉じこもって、あまり間口を広げないという傾向がある。自分の専門分野の複雑さや難しさを知り過ぎているからこそ、逆に他の分野には手を出しかねてしまうのだろう。それに、おそらく自分の分野と他の専門分野との間の遠近感があるのではないだろうか。

その点、文科系出身者は、怖いもの知らずというか、蛮勇があるというか、平気でホイホイと難しげな仕事を請け負ってしまう。

・単語

ある単語は覚えやすく、ある単語は覚えにくいということほ、多分皆さんよくご存知でしょう。これには一部客観的、また一部主観的理由があります。

一番覚えやすいのは、何か具体的なもの、窓とか、家とか、本とか、鉛筆のような、具体的なものを表わす名詞。次に覚えやすいのが感じとることの可能な性質、色とか、形とか、大きさを表わす形容詞、つまり青いとか、丸いとか、小さいなど。次が抽象名詞。四番目が想像しやすい具体的な行為、走るとか、手渡すとか、運ぶを表わす動詞で、最も覚えにくいのは抽象的な行為を表わす動詞です。遂行するとか、保証するとか、中傷するとか、採用するとかなどです。

(拙訳、カトー・ロンプ著『わたしの外国語学習法』創樹社)

・ゴルバチョフの通訳

一九九一年四月、当時ソ連大統領のゴルバチョフが日本を訪れた。来日の二日目、首相官邸での晩餐会がテレビ中継されたのをご記憶だろうか。

海部首相のスピーチ通訳に当たったヒゲの外務省通訳官は、すでに用意されていた訳文を滞りなく読み上げた。ゴルバチョフの通訳は、かの有名なL氏。大統領はテキストを読んでいるというのに、この人は手ぶらのようだ。訳文どころか、原文テキストさえ持っていないのが如実にわかったのは、スピーチ中頃にL氏が、「あっ、今のところをもう一度読んでください」とゴルバチョフに頼んでいたからだ。

なぜL氏にテキストが渡されていなかったのだろうか。もしそうなら、なぜL氏はテキストを前もって手に入れようと必死の努力をしなかったのだろうか、テレビ局で原文および訳文テキストとスピーチを照らし合わせながらモニタリングしていた私は考えた。

実は両首脳のスピーチ・テキストは事前に外務省レベルで交換されており、二十四時間以上も前にマスコミ各社にそれぞれ外務省が承認した翻訳テキスト付きで配布されてあった。おそらくああいうスピーチは、外交的に一字一句おろそかにできないものなのだろう。

もっともL氏が天才的な記憶力と通訳力の持ち主で、幾時間もかけて練り上げられた文章をたちどころに美しい訳文に置き換えられる能力を持っているならそれも許される。

しかし、実際はそうではなかった。L氏はいくつものコンセプトやフレーズをぼこぼこ抜かしてしまっし、本人も焦っていたせい、あのような場にふさわしい厳かで整った美しい文章（原文のスピーチも訳文テキストも、まさにそういう文章だった）にはほど遠いワサワサした通訳になってしまった。

それよりも何よりも私が驚いたのは、L氏がメモさえとっていないということである。これを見ていた英語の同時通訳者もあきれ返っていた……。

自分のことは棚に上げてL氏をこきおろしてきたが、それもこれも私たちもまたいつこんな誤りを起こさないとは限らないからだ。というわけで次の戒めを導き出した。

第一に、原発言がテキストを読む形で行われる場合は、必死でそのテキストを事前に手に入れるべく努力すること。

第二に、逐次訳に際しては、自分の記憶力を過信しないで、必ずメモをとること。通訳能力はメモ能力だといっても過言ではない。

さて、後日判明したことだが、あの首相晩餐会の通訳はもともとはK氏が予定されていて、K氏は当然テキストと訳文を事前に入手して準備していたそう。それをL氏が直前になって「オレが、オレが……」と横取りしてしまったらしい。同じパターンは、例の不

響／共同結合熟悉的的精神的親密的娘、必須要、全力的鬼神的奮戰／共同結合過去的情婦、必須要喋、過去の逸話／共同結合発酵糸豆屋的娘、必須要作造、無限的糸／共同結合蔬菜屋的娘、必須要覚悟、曳大八車／共同結合校長愛嬢、必須要覚悟、退学的危険／共同結合出身名門的生長高貴的令嬢、必須要着用、羽織袴、或最高級礼服……

・国語教育

中学二年の三学期に日本に帰国し、近所の区立中学校に編入した私は、高校受験用として覚えさせられる文学史に載るような作品を、ほとんど同級生の誰もが読んでもいないことにショックを受け、作文の際、点（、）の打ち方について教師に尋ねて、納得のできる答を得られず驚き呆れ、国語のテストで、

「右の文章を読んで得た感想を、左のア～オのなかから選べ」

と求められたのにぶったまげた。

この自国語と自国文学に対する、不当なほどにぞんざいな扱いに義憤さえ感じた。

・機転

ご婦人に続いて今度はソ連側から男性が立ち上がり、大きな声でスピーチを始めました。するとスピーチ中頃にロシア人がおなかを揺すって笑い始めました。何かおかしいことを言っただけなのではないか。日本側は何がおかしいのかと私の言葉を待っています。さあ、困った。そのとき私の頭をよぎったのは、結局みなさん何のことだか分からずにシラーッと座っているという恐ろしい光景でした。何を言ったのか（訳したのではなく）覚えていませんが、とにかくシラケさせてはいけないという思いが天に通じたのでしょうか。日本側もドッと笑い崩れました。これが功を奏したのか、夕食会は大成功で、私に対する信頼もぐっと増したようでした。こうした些細な機転があんなに役に立つとは思ってもみませんでした。しかし後々まで良心は疼いていました。なにしろ日・ソ双方違うことで大笑いしていたのです。機転といえば聞こえはいいものの、実際のところダマクラカシタのですから。

（大沼淳「通訳者の現場便り・“ニコニコ”通訳の告白」、「現代ロシア語』一九八〇年九月号所収）